

詩集 エッセイ集

記憶の固執

銅 鑼

山田かん詩集のために――

井 上 光 晴

廃坑の海に漂うもうひとつの火葬場がある――
いまに坑内キャップをつけた鰯が、糞だめをつつくようにな
ると悪態をつく、朝鮮女郎番の飼う兎小屋の下の突堤に
黄色いひらひらをつけた少女が蹲っている。

年に一寸ずつ沈むこの部落に銅鑼が鳴りわたると、少女は
起ち上って死んだ鰯のような行列のあとに従わねばならぬ
が、泥炭のこびりついたおれの炭札入れには、どんなに握
りしめても十銭銅貨が一枚しか入っていないかった。

| | | |
|---|------------|-----------|
| 一 | 銅 鑼 | 井 上 光 晴 1 |
| 次 | 赤いカンナの花の色 | 風木 雲太郎 2 |
| 目 | かんの牙 | 森 竜 2 |
| 一 | 図書館員「寛」のこと | 永島 正一 3 |
| 一 | | 森 永 種 夫 4 |

ヤンバンからもらいうけた寸足らずの坑木を削って、自分
の足カセを作っている坑夫たちの休日を、一円ボボを買い
なさいと白い切羽のような化粧をした女たちがねり歩く。

コークスの吠える未明、売れ残った女たちは、三番方の坑
夫目あてにもう一度にっぱ椰子のかぶさる黒いトロをのぼ
っていくが、そのとき棹取り兪英生の肉を入れた木棺は低
い納屋と納屋との間から音もなく動きだし、歯と歯、眼と
眼の葬列は、女たちと燃えあがる闇の中で交錯する。足の
とれた肉みたいか、息子の哀号ききたいか。

赤いカンナの花の色

風木雲太郎

山田かんという、詩を書く人間が長崎にいるということを知ってから十数年になる。山田かんという姓名から何となく山田のかかしを連想して、彼の作品に牧歌的な田園調を期待して読んだ私は、いきなり現代の断層から崩壊する危機感が、硬質の言語で訴えかけてくる思考の現場に立たされた思いがした。彼の作品を初めて読んだ私の記憶は、間ちがいなく彼の今日の作品まで持続している。彼の尖鋭な批評性は、彼の作品を論理的に構築し、常に人間の敵にむかって武装しているようだ。現代詩の思想の場で、猛烈に彼は格闘をつづける。彼は山田のかかしどころか、長崎に於ける現代詩の旗手なのだ。小さな平和と地方的な情性が同居して妥協の席を安易につくる、田舎の習慣を彼は拒否する。そんな席での彼の姿は、人見知りして羞かみ照れる子供のような仕草をするのがいじらしい。彼は酒に強い。酔うと唄う。いつも風邪をひいたような声を出す、よい声である。彼の酔態には、いや味がない。よい酒である。轟竜造も酒は強いが、彼は酔うと人情家になる。殊に女を見る眼が好色的になる。その竜造が、かんの家で飲んで

ふたりとも酔っぱらった時の挿話がある。酔うと人情家になる竜造が、文学の話から感動的に、かんに握手をもとめると、かんは手をひっこめて握手しようとしなない。性格的に対照的なふたりであるが、文学的に共鳴して、その感情をすなおに竜造は握手にもとめるのだが、かんはその手を握ろうとしない。こんな場面はよく文学仲間の眼にするところである。それでいて、ふたりは結構仲よく酒を飲んで、お互いに悪口を言っている。山田かんの待望の詩集が世に出ることは、たいへんうれしいし、文学史的にも大きい意味を持つことになるだろう。かんかん照りの夏の日に咲く、カンナの赤い色の鮮烈なイメージを、私はその詩集にいだいている。

(詩人)

かんの牙

轟 龍 造

山田かんとのつきあいは不思議にない年月がたっているように指折りかぞえてみるとまだわずか七、八年、それでいていつもなつかしい男で、一カ月もあわないでいると一年もあわないでいたようなあったときの感激は握手にはじまり肩抱かればかりのていであるが、いざ盃をくちにしてい、ブンガク、セイジ、シャクワイその他もろもろのロン

ギをかわすうちにムジンドウチャクおかまいなくただただかんを攻略せんためのロンソウにおちいり、ああ、こいつとは死んでもふたたびあわないぞと、すてぜりふ残すしまつ。おまえさんのつらみると三日ぐらいはめしがつまいとぼやいたりなげいたりいきどおったりしているうちに日がたてば、やはり、のこのこあいにでかけ、おくさんのまえもはばかりずバリゾウゴンあびせかけ、味方するはずのないおくさんにまで援軍をもとめる私なのに、かんはいつも、おいおこったのか、ほんとにおこったのか、うたでもうたおうか、などとぶちのめされた私に、しょうじょうと松風をならす青春の丘の妖精のごとく藤村のおえふをうたいきかせブンガクの毒気をぬき去るのだった。そんなとき私は三歳年長のこのかんが現代詩新人賞なるものをもらい受賞のことを地元の新聞にかきたてていたとおひ日の、新人賞はもらったけれどこれからだという意味のつましやかな一文や、新人賞もらうまえに「地人」などという同人雑誌にのせていた、働く仲間と呼びかける素朴なうたや、夭逝した実妹をいたんでうたったかずかずのうたガリ版詩集にとじてめている抒情のうたをふいとおもいうかべ、鯨や馬やからすや卒塔婆やコンクリートの高い塀やなんやかんやふくぎつなイメージおりあわせたシニカルでシユールでパルチザンチックでETC・おもたい抵抗の感抱させる詩の源泉にある人間へのいたわりいつくしみをしめじみ味あうのであるが、それをいえばどうせかんへのほめことばよりもかんのかわらざる姿勢の停滞をつつきだすに

きまっているのでいつもだまってうたをきき、わが家のごとく泥酔ごう沈、あくる朝もま夜中のころそろりとぬけだして逃げかえるくりかえし。それでいて、かんはまだ私の家では一度もはめはずしたこともなく、ときたま忙しい生業の私に気がねしながら酒などさげてふらり訪れることがあっても、がやがやわいわいの五人の子供たちのひとりずつのなまえをびたりいいあてたり、だだん、だだんとピストル撃ったり撃たれたりせずちあで子供たちをおおよろこばせしたりしてきどに飲むとかえりはきまってまっすぐにはわが家をめざす、このあたり真似しようたつて真似られる酒のみではないが、のむほどにハレンチをふりまき生身の悔いどころ刻む私には煙たい先輩で、ゲンバクにみまわれ三八銃のあつかいかたも知っている戦中派名ごりの彼には実生活のうえでも学び、詩ではもちろん小説も読みとりかたでもかなわないのだが、牙もつかんはおそろしくこわい。

(作家)

図書館員

「寛」のこと

永島 正一

「かん」と書くときは、詩人だが、「寛」と書くときは図書館員である。

それも、きょうやきのうの館員ではない。員歴二〇年、「司書」であり、「係長」でもある。

彼はもくもくとして、日々図書の分類や目録作成の「仕事」に精励する。

私は彼よりも更に長い員歴だから、彼のことなら何んでも知っているつもりだ。

彼は甚だ、苦勞人である。さまざまな苦しみに耐えぬいて、それをのりこえてきょうまでやってきた。彼の人間の深みと温かさは、苦勞のたまものと思う。

図書館員としても理想的な人間だが、詩人としても立派だと私がいえばウソになろう。実のところ私には、彼の作品がよく分らないからである。しかし世間は、「詩人山田かん」に大いに期待し将来に囑望する。こんど詩集エッセイ集を出すという。私もまた彼の大成を期してこのたびの出版を心から喜びたい。そして、この詩集が一冊でも多く売れるように努力したいと思う。

山田君にのぞむこと、それは、いつまでもけんきょにしておき、自己を築きあげてゆくこと。そしてもう一こと、酒はのんでものまれるな。

(長崎県立図書館長)

森 永 種 夫

昭和二十年、戦局が苛烈になるとともに、学徒動員体制もいよいよ厳しくなった。(旧)県立長崎中学校の校舎内にも工場の機械が持ち込まれて、三年生が旋盤などの作業に就いた。一昼夜三交替制で、もはや授業どころの騒ぎではなかった。私は教師として動員生徒の係長になり、その生徒のなかに山田寛がいた。

暫くして少し仕事を覚えた三年生は、浦上近くの幸町工場に移って作業をするように指示を受けた。そして工場に移ったその日、八月一日、長崎ははじめて米軍の空襲を受け、数時間、私は生徒たちと一緒に目白押しの防空壕のなかで恐怖におののいていた。工場は無惨に破壊され、当分作業のできる見込みもないのに、なお生徒たちの出勤を強要した。学校側では、生徒たちの安全のためにも学校工場に復帰させるように主張した。その主張が通って、生徒たちが学校に戻ったのは八月六日だった。

その三日後の八月九日に原爆投下である。もし幸町工場にそのまま出ていたら、私たちは共にその犠牲になっていたであろう。

学制が六三制に切り替えられたあと暫く私は長崎を離れていた。そしてまた長崎に戻ったとき、私は山田が県立図

書館に勤めていることを知った。

昭和二十九年、私自身も山田のいる図書館に勤めるようになった。かれが詩作に懸命になっていることも知った。国語教師だった私としては恥かしいことだが、戦中戦後授業らしい授業もせず、在学中かれがそうしたことに興味をいだいていたかどうかほとんど記憶になかった。かれの鋭い語感、一家の悲境にもめげず、自ら苦悩しつつ体得したものである。

図書館の職員は司書の資格を取らねばならないことになっている。ところがこの司書の資格にはなんの裏付けもない。だから若い職員はなるべく早く本庁に出て昇進の道をはかろうとする。やっと図書館の仕事にも慣れたなと思う頃になると転任を希望する。残念だがひきとめるすべはない。私も役人のはしくれを勤めたこともあるが、そこには詩の生れる雰囲気はない。私はかれがどうするか気がかりであった。しかし、私の在職する約六年間、とうとうその話を持ち出さなかった。

かれは容易に妥協しない。なにか言おうとするときの目は異様に鋭い。文句を言いに来たなというときは一目でわかる。粉飾なんて頭からできない男である。生一本なところは歩きかたでもわかる。いつも急用でつっ走っているような恰好である。そのくせ時々ふっと妙にうら淋しいおもちを見せることがある。適当ない言葉が見つからない時でもあるだろうか。

かれはまだ図書館に居坐ったままである。そして今度、

なけなしの金をはたいて売れそうにもない詩集を出すという。やっぱり山田だったと、私には一層強いかれの姿が印象づけられている。

(著述家)

作品は、詩、エッセイ毎に制作順の編年体とした。余計な手を加えることを控えることで、並べてみて一寸した感慨を覚えたことがあった。

それは「無題」に始まり「長い道を……」に行きつくモチーフが、歩くことにおかれていたことであった。ぼく自身、意識していたことでなかったために、この俯瞰の図式はかえって己れに突きつけられた刃となった。

実に主体をもって歩きつづけてきたか—ということであり、でなかったら更に逃げる背戸を自と閉じこめたことになる。

この集については、本文にふれさせていたいただいた方々と共に、推薦文を快ろよくご執筆いただいた先輩、恩師、知



原田正路氏撮影

友は勿論であるが、職場の同僚、中川和夫氏、松尾照美氏の親身なご助力があつて初めてなされたことを附記しておきたい。

(山田記)